

第2章 「熟議 2014 in 兵庫大学」実施計画について

1. テーマの決定に至る道のり

「熟議 2013 in 兵庫大学」から、3 か年計画にて、兵庫大学熟議手法を用いて、地域を考える熟議を実施することになり、2 年目となる。1 年目が地域課題の掘り起し、2 年目は掘り起こされた課題から、議論をするテーマを選び、解決策を考えることが目的となっている。

「熟議 2014 in 兵庫大学」の最初のステップは、テーマの決定にあった。兵庫大学での熟議の推進は、熟議プロジェクトチームがそれを担うこととなっており、まずは熟議プロジェクトチームで昨年度の成果を検討し、加古川地域の抱える課題を絞ることとなった。

ここで改めて、昨年度の成果を振り返る。地域のことを考える 1 年目となった「熟議 2013 in 兵庫大学」では、参加者に加古川地域の「強み」と「弱み」を熟慮し、それを持ち寄り議論するという一方で、課題を見出すこととなっていた。その結果、加古川地域の地理的条件から、豊かな自然、利便性と地域内の比較的密接な人間関係に係る要素が「強み」であり、その安定を崩しかねない犯罪や事故を「弱み」と挙げている。背景には、変化を嫌う地域性があり、社会が大きく変化する中で、そこへの危機感、不安もある。

複数のテーブルで行われた議論の成果を取りまとめると「強み」を強化するために、①若年層を中心とした地域住民に対する教育や啓発活動、②世代を超えての交流とコミュニケーションの活性化が、「弱み」を改善するためには、①加古川地域の PR、②外からの人材の定着が、課題として透けてみえる。これら課題の解決を目指しどのような熟議を構成するべきか、熟議プロジェクトチームでの協議が交わされた。もし、それらの解決をテーマとしてワークショップで議論をする場合、啓発やコミュニケーションの手法、PR の担い手といった点に終始し、その場合、予定調和的となり盛り上がりを欠くのではないか、あるいは逆に、教育の問題、人材の地域への関与の問題と捉えるならば、今度は、議論すべき範囲が広くなり目的とする解決策を見出すに至らないのではないかと、といったことが問題として指摘された。

さらに、3 年計画の最終年次、来年度には一定の成果を挙げなければならないが、その成果を見込みながらテーマを決定しなければ、熟議というプロジェクトの意義が問われる、との指摘があった。その観点からは、例えば、啓発や PR が必要、という結論が出てしまえば議論が終われば、討議し市民の役割をも考え実行に移すという、次年度以降の展開は難しくなり、あるいはこれらを加古川地域の自治体も同様に課題と認識していなければ、政策を提言し政策実現に結び付ける、という展開も期待できない。もちろん、有権者（及び将来の有権者）たる市民の参加する熟議を自治体が簡単に無視はしないだろう、との考えもあるが、それが理由だけで対策の優先順位が高くなることは難しいであろう。このように熟議プロジェクトチームでは、「熟議 2014 in 兵庫大学」「熟議 2015 in 兵庫大学」の 2 つを見据えながら

構成を考える必要に迫られていた。3年計画の中間年としては、致し方ない事情でもある。

改めて、昨年度の報告書を確認すると、「…熟慮の段階で指摘され、課題と思われる犯罪の発生率の高さや交通事故が多いことなど安心・安全に係るテーマは熟議により合意形成を行う適切なテーマとも思われ、次年度で取り上げることの重要性を指摘しておく」との指摘が確認された。得られた結論では対立点に乏しくさらに発展的な議論を展開することが難しい、との思いがあったと考えられる。

その背景には、兵庫大学熟議手法で採用するワークショップそのものが有する問題があったのかもしれない。すなわち、熟慮の期間に比べて短時間で行われるワークショップでは、対立点を探るよりも、誰もが合意しやすい内容に収まろうとする傾向がみられる。課題を見出すためにワークショップは有用な方法ではあるが、時間が十分でなければ掘り下げが難しく、結論を急ぐあまりどうしても意見をすべて含めたような、反対が少ない包括的な内容に陥りがちである。先に挙げた、2つの地域の課題は、「強み」を活かす、「弱み」を改善することにつながる地域にとって重要な指摘であり、そこから長期的に様々な施策や事業が派生するが、解決策を見出す目的のための議論には不向きなのである。

そこで、「熟議 2013 in 兵庫大学」での結論をそのままに、安心・安全に係るテーマを重視し、取り上げることにしたのである。

2. 新たな熟議の手法を求めて

(1) 「熟議 2013 in 兵庫大学」の反省点を熟慮と議論に活かす

地域を考える熟議の2年目である「熟議 2014 in 兵庫大学」は熟慮と議論による熟議を市民と一緒に共有し、地域の課題として安心・安全をテーマとして進めることになった。地域における住民の課題について、解決策を考えることが目的である。さらに学術的に、討議型世論調査の手法を一部応用し、議論の前後でどのように意見が変わったのかを検証する。基本としては兵庫大学で独自に開発した、次のような5段階で構成される熟議手法を用いることとする。

「熟慮の段階」：事前にテーマについて学習して、課題に対して認識を持ち議論に臨む準備をする。

「議論の段階」：平等な立場でそれぞれ熟慮の結果として持つ認識を出し合い、議論をする。

「共有の段階」：議論で得られた結論や議論を参加者が報告し、内容を共有する。

「振り返りの段階」：議論によりテーマへの認識が変化したか、また成長があったかを確認する。

「活動の段階」：熟議で出会った仲間とともに、成果を踏まえて実際の活動に移行する。

とはいえ、「熟議 2013 in 兵庫大学」からの反省点もある。昨年度の報告書に従い示すと、第一に、「熟慮の段階」が持つ意味をより明確にすることがある。熟慮について資料を提示するだけで、後は参加者に委ねるのではなく、より深く熟慮を促す仕掛けを設けるべきである、という指摘である。第二には、

短い時間の中での意見集約を急ぐ技術的な問題があったということである。ファシリテーターの能力向上は不可欠であるが、それだけではなく、議論を繰り返すなどの進め方の工夫も必要とされた。

この2点を踏まえ、「熟議2014 in 兵庫大学」では熟慮、議論、そして共有の段階での改善を試みることとなった。

「熟慮の段階」での改善のためには、参加者と熟議プロジェクトチームとの間での双方向性を高めることが必要とされ、そのために、後に詳細を述べるが、ウェブページをプロジェクトとして運営、インターネット上で参加者が意見を述べることができようにした他、その意見に対しては熟議プロジェクトチームからのコメントを掲載することとなった。またテーマに関連する課題をネット上で課し、それらをホームページ上で回答することができるようにするなど、試作的ではあったがインターネットを熟議に導入することで、熟慮における内容を深めることとした。ただし、高校生など、学校を通しての参加者の場合、直接の回答が難しいなど、運用上には制約もあった。

「議論の段階」では、ワークショップ方式が予定調和的であり、結論が最初からわかってしまうのではないかと、との課題がある。また3段階目の「共有の段階」がテーブルでの結論を述べるだけであり、結論が似通ってしまうためにあまり印象に残らず、共有されたといい難い、という課題である。そこで、異なる意見を持って議論をするディベート¹を取り入れることとした。その方法として、「議論の段階」を各テーブルでのワークショップとし、そこで得られた結論を意見として代表者がアリーナの中でのディベートの場に持ち込み、参加者が見守る中でより説得的な意見を選ぶことを「共有の段階」に位置付けるということである。「共有の段階」においてディベートを取り入れることにより、議論を重ねることが可能になる。

(2) 「地の人」「風の人」

熟議プロジェクトチームの構成員は、「議論の段階」では各テーブルにおける進行状況を確認することとなっている。その際に、地域のことをよく知る比較的年齢が高い層の参加者と、若年者での議論がうまく進まない、という問題があることが明らかになった。経験の差が大きいことが最大の要因である。地域で経験を積んだ方と、これから社会経験を積む高校生、大学生と一緒に地域を課題にして議論することはフェアではない。もちろん、新しい発想やアイデアが若い世代より出され議論が活性化することは間違いなく、それを期待しての、多様な参加者による熟議という方針であり、その点からは避けられない。

一方で、地域を考える熟議の3年計画の初年次には、兵庫大学の熟議手法を一般に拡大するという方針があり、中学校や高等学校での熟議手法の確立を考えていた。そのために高校生だけの熟議を実施す

¹ 日本ディベート協会によると、ディベートの特徴とは、

1. 集会や議会等の公共的(public)な議論を行う場において、何らかの論点、課題について、
2. 対立する複数の発言者によって議論がなされ、
3. 多くの場合、議論の採否が議論を聞いていた第三者による投票によって判定される

の3点に集約される。(http://japan-debate-association.org/)

るというアイデアもあった。今回、年齢を基準にテーブルを分け、高校生や大学生による熟議を実現させることをチームとして検討した。そして、一般の方の議論と高校生、大学生による議論のそれぞれの結論は、対立する可能性が高く、それらを「共有の段階」のディベートとして活かすことができるのではないか、と考えたのである。しかし、年齢で区分をすることが、市民として立場を超えて議論を行うという熟議の考え方に対して適切であるのか、との指摘もあった。年齢差別と捉えられかねない点を懸念しての指摘である。

以上のような熟議プロジェクトチームでの議論を踏まえ、地域をよく知る人と、必ずしも地域には通じてはいないが新たなアイデアをもたらす人とを分けて議論をしてはどうか、前者は主として経験ある「地域の大人」が、後者はこれからの「若い世代」が中心になると考えたのである。そこで地域をよく知る人を「地の人」、新たなアイデアをもたらす人を「風の人」と名付け、次のように定義を行った。

地の人 草花が芽吹き大木が根を張り育つ大地こそ、地域を支える基礎になる人、地域の中心となって活動をする人々で、プロデューサーであり、リーダーも務め、また新たな人を育てる教師になることもあります。地下に水脈や地脈が張り巡らされる大地と同様、多様な人々との多彩なネットワークを持ち活動する強みを持ちます。また、降り積もる雨と落ち葉が地を豊かにするように、地の人には、長い歴史と伝統が蓄積されています。一見、地は動かないようですが、水や風、流れ寄せられる砂や礫により形を変え、なにより地上の万物は年月とともに移り変わり、様々な顔を見せることでしょう。

風の人 風が、他所からの香りを運ぶように、地域においても地域に文化をもたらし、考え方をもちます。風の人とは、すなわち外から、その地域に訪れ、その地に魅かれ、そのために骨身を惜しまぬ人のことです。暖かい南風が旅人のコートを脱ぎ去らせたがごとく、風の人はその地域にある頑なな考え方や心情をときほぐす役割を果たします。もちろん、風は淀みを嫌い一所には留まらないかもしれません。しかし、吹く風が次に新たな風を呼び、また風が季節の変わり目を告げるように、風の人には次から次へと現れ、地域の変化を告げる役割を果たすことでしょう。

「地の人」「風の人」のテーブル（班）を分けて議論を行うようにするのである。さらに、人を分けるのではなくどちらかの志向の傾向があるということではないか、またこうした傾向はどこかで区分されるのではない一種のスペクトラムであり、参加者が選ぶにしても、基準がなければ選択は難しいのではないか、など熟議プロジェクトチームで検討を進めた結果、いくつかの設問のあてはまりの合計得点を目安に、「地の人」「風の人」を思考の傾向として、自己申告することとなった。次のような設問である。

【設問】 次の各項目について、あなたはどの程度あてはまるとお考えですか。5つの選択肢から選んでください。最後に、各項目で選択した点数をすべて足し算してください。合計点が「21」より大きいと「地の人」の傾向が強く、小さいと「風の人」の傾向が強いとされます。

◆選択肢

- 全然あてはまらない【1点】
- あまりあてはまらない【2点】
- どちらともいえない【3点】
- だいたいあてはまる【4点】
- 非常によくあてはまる【5点】

◆項目

1. これまで暮らした地域の中で、自慢できるような伝統、歴史、名所、名物などをたくさん思いつく地域がある。
2. これまで暮らした地域の中で、親戚や友人が特に多い地域がある。
3. これまで暮らした地域の中で、生涯住みたいと思える地域がある。
4. 多くの地域に暮らすより、一つの地域に長く暮らすことに魅力を感じる。
5. 仕事や学業の関係で引っ越しをすることに抵抗を感じる。
6. 自分が暮らす地域での行事には、なるべく出たいと思う。
7. 近所の人には、なるべく挨拶をするようにしている。

3. 安心・安全を議論するために

「議論の段階」でのワークショップを経て、「共有の段階」でのディベートを実施するとの考え方に基
づき、検討を進める中で、テーブルごとのワークショップでの結論が、それぞれ異なる2つの対立する
意見となり、それを代表者が持ちよりディベートとして成立するのか、との疑問が生じていた。さらに、
安心・安全がテーマとはいえ、やはり熟議に付すテーマとしては、範囲が広すぎて、ワークショップの
各テーブルの結論が方向違いになることも想定された。安心・安全といっても、自然災害から身を守り、
あるいはテロや重大犯罪を抑制し、また軽犯罪や振り込め詐欺などの身近な犯罪へ住民が力を合わせて
対応する必要性、さらには年金や介護など社会保障の充実、医療機関が身近にあることなど、暮らしの
安心を守ることで議論の対象となる可能性がある。一方で、テロ対策を、別のテーブルでは津波から
の避難を、そしてまた別のワークショップでは介護保険の課題を取り上げ議論をして、一定の結論が出
た場合、これらを持ち寄って共通の土台において対立する意見を討議するディベートとすることができ
るのであるのか。

第一に、安心・安全についてさらに絞ってテーマを熟議に付すこと、第二に、そのテーマに対するワ
ークショップの結論がテーブルごとに異なる、いわば対立をもたらすようなものであること、が必要と
なった。熟議プロジェクトチームは、これらの2点について検討を行うとともに、ディベートを具体的
にどのように進行すべきかについても頭を悩ますことになった。ディベートの進行については、進行役

を誰にするのかということでもあり、これを山崎清治氏（特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫）に依頼することとし、以後、進行とともに課題についても、山崎氏の意見も踏まえつつ、検討を進めることとなった。

さて、安心・安全をテーマとした背景には、加古川地域における犯罪、特に軽犯罪の発生を昨年度の熟議の際の「弱み」に挙げていた参加者が多かったことがある。また、発生が予想される南海、東南海のトラフ型地震、あるいは山崎断層を震源とする直下型地震、さらに風水害など比較的穏やかに見える加古川地域において、それ故に危機感なき状況に迫る危険への懸念がある。つまり、安心・安全とは、直接的には防犯であり、防災なのである。

そこで、安心・安全をテーマに絞り、下記の2つとした。その上で、「議論の段階」でのワークショップでは、市民自らが社会を担う、そのための合意形成を考える場としての意義を深めるために、市民目線での議論を促す内容とした。

テーマ1. 加古川地域の防災・減災

災害列島にあって、加古川地域は比較的恵まれているとはいえ、南海、東南海地震、また山崎断層を震源とする直下型地震など近い将来の発生が予想される地震災害の可能性は高まり、さらに温室効果ガスを要因とする気候変動により、風水害も巨大化する傾向にある。加古川地域も災害に備え、少しでもそれを減らす努力が必要となっている。防災・減災において、鍵となるのが住民の力であり、コミュニティの結束である。20年前の阪神・淡路大震災でも、コミュニティがしっかりとしている地区ほど、揺れの被害の割に人的な被害は小さかったと言われている。大規模災害に際し、市民がいち早く自身と家族の身を守り、そして地域や社会を支え、災害発生後も安全を確保するためには日頃から何を準備し、備えるのかを考える。

ワークショップでの話し合いのポイントは、下記の通りである。

- 自主防災組織の設立と運営
- 地域での避難路の確保と周知
- 地域での避難訓練計画
- 消防団・水防団との連携
- 地域での避難所運営・人権確保や安全保持等
- 災害ボランティアの受入れについて

テーマ2. 加古川地域の防犯

軽犯罪発生率の高さは、当該地域の課題とされる。割れ窓理論に基づき、軽犯罪も見逃さない体制により、一時期高かった凶悪犯罪の発生を抑えたニューヨークに倣い、重大犯罪につながる懸念を払拭する必要がある。また高齢者を狙う詐欺事件、幼児を狙うわいせつ目的の事件など、弱者といわれる人々を対象とする犯罪の増加など、犯罪は地域社会への影響が大きく、防犯は地域での関心事でもある。と

はいえ、予算等に制約のある中で、これ以上の警察官の拡充などには限界もある。地域住民が協力し、見守りなどを展開することにより、犯罪を減らすことに成功する事例も多く紹介される中で、住民と自治体、警察や学校など関係機関との連携による防犯への期待が高まっている。ゲーテッドシティのように閉じて拠点を固める方法もある反面、むしろ市民の目があることで、犯罪を抑制する方法もある。日常犯罪から自分たちの安全と安心を守るために、何をすべきかを考える。

ワークショップでの話し合いのポイントは、下記の通りである。

- あいさつ運動など地域で人々が声を掛け合い見守る方法
- 学校教育のあり方
- 地域防犯組織のあり方
- 啓発活動について
- ボランティア警察官など防犯の新たな仕組みなど

さて、議論が対立的になるためには、話し合う焦点を絞る必要がある。「熟議 2013 in 兵庫大学」が課題探索的であったために、予め論点を絞ることが良しとされなかったのに対し、今回は課題解決的な熟議であるため、一昨年、生涯学習社会の構築をテーマに議論を行った「熟議 2012 in 兵庫大学」での方式を参考にした。その際は、サブテーマとそこで話し合うべき論点を用意することとしており、これにより、参加者はより熟慮を深め、議論に臨むことができたのである。

「熟議 2012 in 兵庫大学」では、複数のサブテーマを用意し、そこから参加者が関心に応じて選び、複数のサブテーマについて、それら毎に異なるテーブルでワークショップが進められた。しかし、「熟議 2014 in 兵庫大学」では、「共有の段階」をディベートで行うため、複数のサブテーマを同時進行的にワークショップで議論をする、ということはできないのである。つまり、テーマ毎にサブテーマを1つずつ指定しなければ、時間内に議論を終えることが難しいのである。

サブテーマを決定するにあたり、熟議プロジェクトチームでは、それ自身を参加者の熟慮に組み込むこととした。つまり、提案から参加者が選ぶ、ということである。

テーマ 1. 加古川地域の防災・減災

- ①事前復興にどこまで力を入れるべきか
- ②情報保障のために何をすればよいか
- ③安全・危険の判断は誰がすべきか
- ④人口減、財政難の中で防災をどうするか
- ⑤大規模災害時、各自で避難することができるのか

テーマ 2. 加古川地域の防犯

- ①防犯カメラは必要か
- ②防犯コミュニティづくりには何が必要になるか

- ③被害者を生まない地域の環境づくりは可能か
- ④割れ窓理論に基づく地域の防犯対策は有効か
- ⑤罪を犯さなくてもよい社会を地域から作ることができないか

熟慮段階の宿題として、参加者に上記からの選択と理由の記述を課した。広くテーマについて考える機会を与えるとともに、自分が何に関心を持っているのか、またそれはなぜかを熟慮することに繋がる。そして上述のサブテーマがいずれも賛否分かれる内容であることにも注意をして欲しい。ワークショップでの議論の結果、テーブルごとに結論が異なることを期待している。すなわち「共有の段階」でのディベートを進めることも組み込まれたサブテーマである。

では、参加者が選んだテーマは何か。

テーマ 1. 加古川地域の防災・減災 ⇒ 安全・危険の判断は誰がすべきか

テーマ 2. 加古川地域の防犯 ⇒ 防犯カメラは必要か

安心・安全という課題から、参加者との双方向的なやり取りも経て、議論すべきテーマ、すなわち「安全・危険の判断は誰がすべきか」、及び「防犯カメラは必要か」を見出した。

安全・危険の判断は誰がすべきか、にはその責任を行政に課すべきか、個人が引き受けるべきか、という対立点が内在する。事故や事件に際し、厳しく自己責任を問う声がある一方で、災害があった場合に、行政の対応が責められるのも常である。災害が発生する以前の判断、あるいは災害直後の判断が生死を分けるだけに減災、防災の課題として議論が分かれるであろう。

また、防犯カメラは必要かは、その是非を問うものである。防犯カメラが本当に犯罪抑止に役立つのか、個人情報やプライバシーの侵害につながらないか、との懸念も指摘される。一方で、犯人の逮捕に防犯カメラが寄与する事例も数多い。突き詰めるならば、安全のために自由が奪われる懸念という、安全か自由か、との対立が根深くある。

4. 「熟議 2014 in 兵庫大学」の詳細

テーマや進め方など「熟議 2014 in 兵庫大学」の企画についての熟議プロジェクトチームでの検討と並行しつつ、開催時期の設定、会場の確保、職員の配置、さらに参加者の募集とファシリテーターの育成など、「熟議 2014 in 兵庫大学」の実施に向けての取り組みを行ってきた。

開催日程の設定については、熟議プロジェクトチームの副島学長室長の事前のリサーチ等により、高校生の参加を優先し、中間試験と期末試験の間に設定、また 11 月 24 日（月）という連休最終日に合わせることで、多様な参加者が参加する体制を整えた。会場については、ワークショップに加え、アリーナ方式でのディベートを行うことができるよう、兵庫大学内の複数の教室を確保し、適切な運営を行う

ために、主として記録係などの業務について兵庫大学の職員を配置した。出勤は職員にとっての負担ともなるが、全学を上げて熟議を成功させるための体制としている。

参加者の確保であるが、一般募集を9月から始めるにあたり、加古川地域の高等学校への案内を行い、熟議が高校生や大学生の能力向上に大きな成果を上げていることなどを材料に、高校生の派遣の依頼に回った。これは大きな反響を呼び、積極的に応じる高等学校が多くあった。さらに、募集に関するチラシを作成、加古川地域の商工会議所、自治体に対し働き掛けた。特に自治体に対しては、職員の派遣を依頼した。さらに、2014年の市長選で当選された新任の岡田康裕加古川市長への出席と、冒頭のあいさつを依頼、これに快く応じて頂いたこと、また初めて加古川市との共催となったことは、今後の熟議の発展を考える場合、重要なメルクマールとなる。

同時に、兵庫県いなみ野学園、NPO法人シミズシーズなど、兵庫大学の関係諸団体への案内も行うとともに、一般に対しては、チラシやウェブページを使つての募集も始めた。ただし、一般市民への熟議の浸透度は十分ではなく、これは反省材料でもある。

「熟議2014 in 兵庫大学」の遂行は、当然、これら実働部分に依存するが、その詳細の記載は当報告書の範囲を超えるため、以下では、熟議の進行に必要な企画の詳細について述べることにする。

(1) 「熟慮の段階」における双方向性

「熟議2014 in 兵庫大学」の特徴の一つが、9月に立ち上げたウェブページを使用しての双方向性の確保である。これは「熟慮の段階」をより深めるためと、可能であれば参加者間、あるいは参加者と熟議プロジェクトチームとの間での「議論の段階」以前の情報交換を目的とした。

その方法として、熟議プロジェクトチームでは、「熟慮の段階」で、2つの宿題を課し、その結果をウェブページ上で提示し、参加者がさらに意見等を寄せることができるようにしていた。

第一の宿題が、先述のとおり、サブテーマを選ぶ、という内容である。募集期間が終わり、参加者が特定された、2014年10月23日に、郵送にてこの最初の宿題を課した。宿題を踏まえ、どのサブテーマを選択したかについては上述の通りである。最初は、熟議における「熟慮の段階」に相当するため、今回の熟議の進行のマニュアルともなる『「熟議2014 in 兵庫大学」の進め方』とともに送付した。なお、高校生については高等学校を通しての依頼であった。郵送により返却、集められた宿題を分析、集計した結果について、ウェブページ上での回答は、宿題を課してから2週間後の11月7日である。選定されたサブテーマと、その理由とを明らかにした。

第二の宿題を課したのは、「議論の段階」となる当日の1週間前の11月17日である。これは主にウェブページを使つての課題と、返信もウェブ上で行うことができるようになっている。この宿題は、議論に向けて考えるトレーニングともなり、またサブテーマには、考えにおいて対立点があることを明確にするための内容となっている。

具体的には、下記のように「防災」および「防犯」に関わる状況を想定し、それに関する設問に回答するものである。

防災・減災について

【想定】 行政による最新の調査により、断層の地図が作成されました。その地図から、あなたが長年住み慣れている借家であるアパートの直下にも断層があることがわかりました。この断層が動くことで直下型の地震が発生します。とはいえ、地震が数年以内に起きるというわけではないようです。専門家の予測では、アパートの近辺では、震度 6 の揺れになるといいます。アパートは古いため、揺れにより破壊される可能性があります。

【設問】

- 1.今後 10 年間で考えた場合、同じアパートで生活を継続することについて、安全と判断しますか、危険と判断しますか。判断の結果とその理由をお答えください。
- 2.その判断に基づいて、あなたは何らかの行動を起こしますか。その理由を含めお答えください。

防犯について

【想定】 ある高等学校の周辺のエリアで、痴漢事件が発生したため、PTA からの求めに応じ、その高等学校では生徒の安全を守るため学校の敷地内に、学校の周囲を見渡すことのできる防犯カメラを複数台設置しました。ある時、生徒が校則に違反し喫煙をしているところが、防犯カメラに映り、その生徒は停学の処分を受けました。

【設問】

- 1.生徒の安全を守る、という本来の目的とは異なり、生徒の校則違反の取り締まりに防犯カメラが使われたことについてあなたはどのように考えますか。お答えください。
- 2.防犯カメラの情報の管理についてあなたの考えをお答えください。

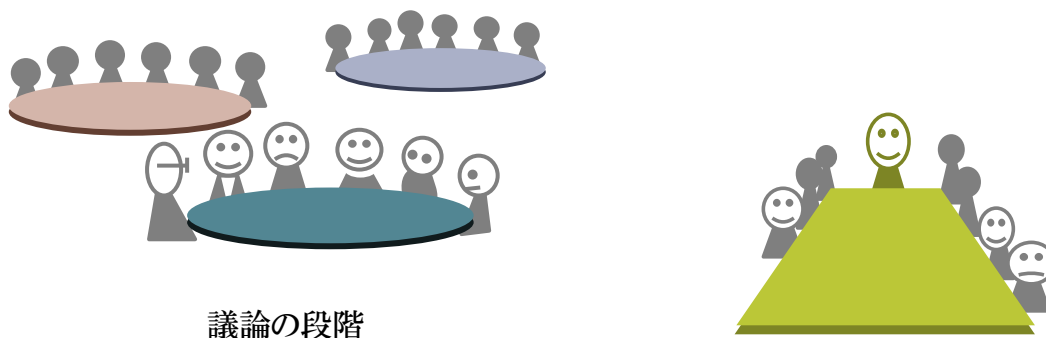
こうした設問が「議論の段階」において、具体的な経験や想定し得る状況を踏まえて、ワークショップでの議論に必要な熟慮を促す。これら「熟慮の段階」で得られた詳細については、別章に記載する。

(2)「議論の段階」と「共有の段階」における討議の方式

先述のとおり、「議論の段階」でのワークショップと「共有の段階」での代表者によるディベートを行うための具体的な方法について、山崎氏の意見も参照しつつ、次のように定めた。

ワークショップでは、自己申告に基づいて「地の人」「風の人」でテーブルを作り、学生ファシリテーター、高校生、大学生、社会人を配置した。当初、「地の人」には社会人が、「風の人」には高校生、大学生が多くを占めると予想したが、実際には異なり、どのテーブルも高校生や社会人が適当に配置されることとなった。ワークショップ方式で、2 つのテーマ（「安全・危険の判断は誰がすべきか」「防犯カメラは必要か」）の議論を行い、まとめの段階で、ディベートに際してのコーディネーターである山崎氏の質問への回答をフリップに記載し、ディベートの場に臨む。ディベートはテーブルの代表者 1 名が参加する仕組みであり、ここでテーブルでの結論を主張し討議を行う。

ディベートでは対立する主張があることが前提となるが、その主張の元となるワークショップでの結論がテーブルにより異なるとは限らない。これについては、「地の人」と「風の人」と立場が異なるがゆえに、それぞれのテーブルによって異なる結論が出ることを期待していた。



ワークショップ方式により2つのサブテーマについての議論を行います。

議論がまとまった後、コーディネーターの質問へ回答を記載します。



代表者はその回答を持って中央のテーブルに移動し個々のワークショップでの答えを踏まえ議論をします。

(3) 討議型世論調査の応用

兵庫大学熟議方式の特徴の一つには、討議（論）型世論調査を一部応用している点がある。討議型世論調査は、わが国では東日本大震災後、津波を要因とする福島第一原子力発電所の放射能漏れ事故に伴って、稼働が停止している国内原子力発電所の状況を踏まえ、将来のエネルギーバランスを検討する「エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査」（2012年）などが実施され知られている²。討議型世論調査では参加者に対し、議論の前に資料や専門家からの十分な情報を提供し、その後、小グループでの議論を行い、その前後でアンケート調査を実施、意見や態度の変化を見る。本学では、参加者に対し行ういずれも記名式での事前アンケート<p137>、事後アンケート<p143>において、テーマに関連した同じ質問項目を設け、事前と事後での変化を追跡することができるようにしている。

事前アンケートは、郵送法による配布と回収を行った。アンケートは参加者が確定した後、『「熟議 2014 in 兵庫大学」の進め方（資料 A）<p128>』、及び、先述の最初の宿題であるサブテーマの選択に関わる資料（資料 B）<p133>と共に、2014年10月23日より送付、アンケートへの記入の後、宿題と同封の上、返送してもらった。

事後アンケートは、11月24日の当日に、「議論の段階」「共有の段階」を終えて後、実施、その場で回収を行った。このアンケートへの記載を「振り返りの段階」と位置付けている。アンケートが議論を振り返る内容であるだけでなく、自分自身の変化を確認することを期待しての位置づけである。

記名式のアンケートであるため、事前と事後の変化を個人ベースで追跡し分析することが可能である。

² エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査実行委員会『エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査調査報告書』2012年8月27日（改訂版）

ただし、本報告書にそうした分析の結果を記載しておらず、事前と事後の比較はあくまでもデータセットベースで行っている。

(4) 学生のファシリテーター養成

兵庫大学熟議方式のもう一つの特徴は、「熟議 2012 in 兵庫大学」以来の伝統として、学生がファシリテーターを務めることである。本来、ワークショップなどでは専門家のファシリテーションが必要とされる場合が多い。特に、テーブルでの議論に不慣れな市民が多い場合、発言を引き出し、あるいは制御し、議論を盛り上げ、参加者の満足度を高めるためには、ファシリテーターの力量が大きく影響する。本学では、学生を訓練することによりこの実現を目指している。熟議には学生の教育機会、という機能があると考えており、それを可能にするために一連のプログラム化が必要である。初めてファシリテーターという役割を担う学生も多く、講習会や予行演習などは不可欠となっている。

例年は、熟議プロジェクトチームの企画によるファシリテーター養成のプログラムが中心となるが、本年度より、2014年4月に開設された、兵庫大学エクステンション・カレッジにその機能を委ねることとした。兵庫大学エクステンション・カレッジは、大学開放の理念のもと、兵庫大学での教育機会を公開し、知識基盤社会において高まる生涯学習のニーズに応え、市民社会の形成を目指し設置された。特に、その理念として「シティズンシップ教育」を掲げており、このことは市民による対話での合意という熟議にも直接的に関わることである。

回	日程	時間	内容・講師
第1回	10月7日 (火)	18:00~19:30	ワークショップとはどのようなものか 小林 洋司 (保育科講師)
第2回	10月14日 (火)	18:00~19:30	コミュニケーションの重要性 北島 律之 (社会福祉学科教授)
第3回	10月21日 (火)	18:00~19:30	全員参加でのワークショップの実際① 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長)
第4回	10月28日 (火)	18:00~19:30	全員参加でのワークショップの実際② 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長)
第5回	11月4日 (火)	18:00~19:30	全員参加でのワークショップの実際③ 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長)
第6回	11月11日 (火)	18:00~19:30	ファシリテーションの定着 田端 和彦 (社会福祉学科教授)

表 2-4-1 「ワークショップの運営とファシリテーター養成のための講座Ⅱ」の内容

2014年度後期には、その講座として「ワークショップの運営とファシリテーター養成のための講座Ⅱ」を設け、ファシリテーターとなる学生は6回の講義に出席することとなった【表 2-4-1】。講座には、熟議プロジェクトメンバーも講師として参加している。講座は一般の方も受講するものであり、学生は市民に交じって受講をした。なお、ファシリテーター以外の学生については、ワークショップの実演の回であり、ワークショップに慣れるための機会として同講座の3、4、5回目に参加することとなった。

その後、11月15日（土）にシナリオに基づく予行演習を行った。こうした学びを通し、学生をファシリテーターとして養成しており、その能力は主として授業だけではなく、今後のチームアプローチなどに役立つと確信をしている。

（田端 和彦）

5. 熟議ウェブページの運用について

本年度より、本学の公式ウェブページの直下に「熟議 2014 in 兵庫大学」特設ページを立ち上げ、その運用をおこなうことになった。開設の目的は次の通りである（開設のための申請資料より抜粋）。

- ①本年度開催予定の熟議について広く告知を行い、参加者の募集につなげる他、当該事業について全国に情報を発信し、兵庫大学・兵庫大学短期大学の知名度向上を図る。
- ②資料を提供し、主催者と参加者との意見の交換等を提示して、熟議における熟慮の段階の充実を図ることにより、議論での内容を深化させるとともに、参加者の参画意識を高め、その後の協働の可能性を高める。
- ③昨年度までの熟議の成果等を掲載することで、兵庫大学の熟議手法の理解を深めること、又、これまでの成果を踏まえて本年度の熟議が展開されることの認識を共有し、3年計画のステップ部分としての位置づけを明確にする。

本学は、地域連携の一つとして2012年より熟議に取り組んでおり、地域の皆様にもご参加頂いている。継続してきた熟議の成果を広く発信し、あらたな参加者募集の告知や参加者との双方向のやりとりを充実させることは、地域に根ざす本学の使命でもある。その取り組みを通じ「熟議といえば兵庫大学」といった認知度を高めるための手段として「熟議 2014 in 兵庫大学」特設ページを立ち上げることとなった。これらの目的をもとに、8月6日に「熟議 2014 in 兵庫大学」特設ページの開設が正式に認められ、9月13日より次の URL で公開を開始する運びとなった【図 2-5-1】。

<http://www.hyogo-dai.ac.jp/jukugi/>

なお、大学の公式ページのトップページに「熟議 2014 in 兵庫大学」特設ページへのリンクのバナーが掲載された。

熟議2014 in 兵庫大学

兵庫大学・兵庫大学短期大学部
熟議プロジェクトチーム

お知らせ | 熟議の関連資料 | 意見と回答 | 過去の熟議開催 | 関連リンク集 | 熟議参加申込 | 問い合わせ



[トップページ](#) > [お知らせ](#)



新着情報

ウェブの更新やさまざまなお知らせを記します。

- 【ご案内】 2014/12/01 熟議ご参加の御礼とこれからのことを掲載しました。
- 【ご案内】 2014/11/22 宿題に対して寄せられたご意見(一部)を追加しました。
- 【ご案内】 2014/11/21 宿題に対して寄せられたご意見(一部)を追加しました。
- 【ご案内】 2014/11/20 宿題に対して寄せられたご意見(一部)を掲載しました。
- 【ご案内】 2014/11/18 熟議トピックスページに記事を追加しました。
- 【ご案内】 2014/11/17 熟議のための宿題②と回答フォームを掲載しました。
- 【ご案内】 2014/11/07 熟議の防災と防犯に関するテーマが決定しました。
- 【ご案内】 2014/10/23 熟議トピックスページに記事を追加しました。

Copyright(C) 2014 HYOGO UNIVERSITY. All Rights Reserved.

図 2-5-1 「熟議 2014 in 兵庫大学」特設ページ (一部抜粋)

大学公式ページのもとで、熟議に関わる情報を公開するにあたっては、次の段取りを踏んだ。

1. 熟議プロジェクトチームによるミーティングにおいて、「熟議 2014 in 兵庫大学」に関わる内容が取り決められ、その情報を発信するためのウェブページ案を制作する。
2. 制作した案は、学内限定閲覧サイトにアップロードし、プロジェクトチームリーダーをはじめ、その発信情報に関わるメンバーにより、共有および確認をおこなう。
3. 確認後、外部発信をおこなうための「ウェブサーバ利用申請書」をその都度学長室に提出し、発信するコンテンツの検閲および了承を得る。

上の手順により、正式に外部公開が可能となる。了承を得るまでには一定の時間を要するが、それに至るまでのウェブページ作成とその確認について、できる限り迅速な対応に努めることにした。こうして、「熟議 2014 in 兵庫大学」特設ページの制作がスタートした。制作は、熟議プロジェクトメンバーがその任にあたったが、次の点を意識した。

- ・ウェブページの閲覧において、使用が想定される各種ブラウザによるデザインやコンテンツの見え方をできる限り確認し、正確な情報発信を心掛けること
- ・熟議に参加ならびに閲覧される幅広い世代の人たちが、ウェブページ上で迷うことなく必要な情報を得ることのできるフレームを構築すること
- ・学生が将来的に熟議のウェブページ制作および運営の担い手になれることを想定し、教育的な配慮のもと、汎用性のある設計と技術で構成すること

これらは、ウェブページの公開において当然のことではあるが、欠かすことのできない事項であった。特に、本学の学生が毎年ファシリテーターとして熟議に参加していることを踏まえ、熟議に関わる学生の活躍の場が今後広がるよう、備えて進めることも重要と考えた。

ここからは、トップページのメニュー構成とその内容について触れる。大きく分けて「お知らせ」「熟議の関連資料」「意見と回答」「過去の熟議開催」「関連リンク集」「熟議参加申込」「問い合わせ」のページ切り替えの枠組みを用意した。

「お知らせ」のページは、「熟議 2014 in 兵庫大学」の特設ページのトップページにあたる。多くの人々に兵庫大学の熟議の関わる取り組みを知って頂く「顔」となるページである。トップページには、昨年度の熟議の雰囲気わかる写真を貼り付けた。本学学生がファシリテーターとなって、グループの進行をおこなっている様子である。ウェブページへの写真の掲載について快く承諾して頂いた。トップページには「熟議 2014 in 兵庫大学」のポスターを掲げ、ウェブページの更新情報を随時掲載した。特に参加者の申し込み状況(参加予定人数)を日々発信することで、既に参加申し込みをされた方およびこれから参加申し込みを検討されている方への士気を上げるよう努めた。また、熟議にまつわるトピックスを不定期に発信することにした。特に、ワークショップならびにファシリテーターとして熟議に参加する本学学生の事前の研修会の様子を取り上げた。さらに、研修会の日程や熟議当日までの予定についてカレンダーを設けた。

「熟議の関連資料」のページには、「熟議 2014 in 兵庫大学」の実施要項を掲載した。これにより、主旨を深く理解して頂いた上での参加申し込みが可能となった。また、本学の熟議は、熟慮の段階、議論の段階、共有の段階、振り返りの段階、活動の段階を基本として進められるが、その中の熟慮の段階の役割をこのページが果たすことになった。参加者への宿題の提示や報告事項の掲載をおこない、参画意識を高めた。必要に応じて文字サイズを拡大縮小できるよう、閲覧の仕方にも配慮した。

「意見と回答」のページは、「熟議 2014 in 兵庫大学」に関わるさまざまな質問を受け付け、それに対する回答ができるような場を設けた。しかし、進め方に関する数件の回答のみに留まり、活性化することはできなかった。一方で、提示した宿題に対する参加者からの回答については、寄せられた中からいくつかを掲載して熟慮の段階の充実を図った。熟議当日まで時間が切迫していたこともあり、どれだけの参加者に浸透できたかは定かではないが、今後はより深い双方向的な意見交換ができる枠組みを早い段階から探っていくべきであろう。

「過去の熟議開催」のページには、2012年7月1日に開催された「熟議 2012 in 兵庫大学」、2013年11月24日に開催された「熟議 2013 in 兵庫大学」に関する報告書などを掲載した。成果を掲載することで「どのようなことがおこなわれてきたか」そして本年度「どのように進展するか」という立ち位置を示すページとなった。

「関連リンク集」のページには、熟慮の段階における資料提示の役割をもたせた。今年度の「熟議 2014 in 兵庫大学」のテーマである安心と安全に関連して、加古川市、高砂市、稲美町、播磨町より防災および防犯に関わる取り組みや資料を提供して頂いた。具体的には、二市二町の公式ウェブページに掲載されている情報とリンク先を中心に掲載することになった。当初は、幅広い防災と防犯が対象であったため、提供資料もそれに準じていた。しかし(熟議当日を見据えて)テーマが絞られてからは、それに焦点をあてた資料を厳選して提供することが結果的にできなかった。熟議当日までの学習を促進するためには、資料提供の役割はきわめて大きく、このページの活用が今後重要になってくる。

「熟議参加申込」のページは、インターネットを通じて、もしくはFAXを使用して参加申し込みができるような体制を整えた。申し込みフォームそのものは、学長室にて作成および受け付けがおこなわれた。また、今回は参加申し込みの際に地域にまつわる「地の人か風の人か」という指標を申告することになり、その判別のための参考となるページを作成した。

「問い合わせ」のページには、交通アクセスや連絡先を掲載した。そして、ウェブページ全体のサイトマップについても作成した。

日々ページが増えていくことは立ち上げ当初から予想されていたため、追加が容易なページ構成に努めた。結果的には上のメニュー項目の大きな枠組みを変更することなく、運用ができた。一方、更新から次の更新までの日が空くことも多々あり、アクセスしても変化が見られない状態が続いてしまったことも事実である。情報発信のコンテンツの充実とともに、計画性をもったウェブページの運用が今後求められるであろう。

最後に、開設の目的がどの程度達成できたかについて触れておく。ネット上のサーチエンジンGoogleを用いてキーワードを入力すると、それに関連したワードが候補として表示される機能がある。ある時「熟議」と入力すると、その後に「兵庫大学」が一つの候補として挙がるようになっていた。これは「熟議 2014 in 兵庫大学」の参加者のアクセスによるところが大きいと思われる。それにより「熟議」というキーワードから、兵庫大学で開催されていることを知るきっかけとなり「熟議 2014 in 兵庫大学」特設ページへの導きにもつながった。兵庫大学が地域の皆様とともに熟議に取り組んでいることを広く告知し、また住み慣れた地域の未来について共に考えることを前面に出すための手段として、「熟議 2014 in 兵庫大学」特設ページが一定の役割を果たしたと考える。

(森下 博)

熟議プロジェクトチーム

田端 和彦	兵庫大学エクステンション・カレッジ長 / 社会福祉学科 教授
吉原 恵子	生涯福祉学部長 / 社会福祉学科 教授
北島 律之	情報メディアセンター長 / 社会福祉学科 教授
森下 博	経済情報学科 准教授
木下 幸文	健康システム学科 准教授
久井 志保	看護学科 准教授
井上 朋子	短期大学部保育科 講師
小林 洋司	短期大学部保育科 講師
副島 義憲 (事務)	学長室長
柏村 裕美	学長室員